

# 芥川龍之介『桃太郎』——天才と圧制者

渡部 麻実

## はじめに

芥川龍之介『桃太郎』は、「サンデー毎日」夏期特別号「小説と講談」（一九二四・七）の「創作」欄に、吉田絃二郎「故郷の町」、伊藤貴磨「或る博士の死」、牧野信一「渚」、北村喜八「女人」等と共に掲載された。

日本五大昔話の一つとして、伝承の基盤層に位置し、日本人のメンタリティに著大な影響を与えてきた「桃太郎」<sup>①</sup>は、しばしば翻案やパロディ化の対象とされてきた。明治初頭に書かれた尾崎紅葉『鬼桃太郎』<sup>②</sup>から、たとえば、本多豊國による非孝行型の現代版『ももたろう』<sup>③</sup>に至るまで、実に多種多様な桃太郎が存在する。それらがいずれも、説明の要なくパロディーとして了解されるのは、「桃太郎」が、「昔から日本人全部に歌ひ継がれて来た日本の詩」<sup>④</sup>だからに他なるまい。他方、黍団子一個、もしくは半分で犬・猿・雉に忠誠を誓わせ、危険な仕事への同行を強いる点、特段の悪行が記されていないにもかかわらず、鬼たちが

が容赦なく攻め討たれる点等、「桃太郎」が矛盾を抱えた物語であることも、看過されてきたわけではない。多くのパロディーが生まれたのも、そうした矛盾に対する反応として理解される。

芥川『桃太郎』の語り手は、老夫婦も持て余す乱暴者の桃太郎が、八咫鳥の嘴の一突きによつて人間界に運ばれた存在であることを、冒頭と末尾で反復して語り、強調する。つまり、桃太郎の人界への登場を、神武天皇東征に際し道案内を務め、天皇を大和へ導いた八咫鳥に助けさせるといふ設定をほどこしているのである。そのうえで、桃太郎一行に、鬼の老人や子供たちの容赦ない殺害、娘たちの陵辱といった「あらゆる罪惡」の限りを尽くさせる。

芥川『桃太郎』もまた、鬼が島征伐を、一方的な暴力と侵略の物語に書き換えたパロディーに他ならない。長らく等閑に付されていたそれは、ポストコロニアリズムの流行と相俟って、一九八〇年頃より組上に載せられ始め、植民地主義、あるいは、資本（黍団子）を持つ桃太郎と持たざる犬・猿・雉をめぐる搾取の構図に対する批判意識を備えた小説

として、再評価の対象となった。

たとえば中村青史「桃太郎」論<sup>(5)</sup>は、「黍団子の一つか半分かをめぐっての桃太郎と犬の攻防は、まさに資本家と労働者の賃金をめぐっての闘争なのである。(略) 人間社会へののろいがこめられてくる」と述べ、芥川『桃太郎』の「残虐行為」について、「後の日中戦争時の南京事件をも予言的に表現したもの」と指摘する。

また、関口安義「芥川龍之介の桃太郎観」<sup>(6)</sup>は、小説『桃太郎』と同じ年に、別の文脈で桃太郎に言及していた芥川の、意味深長な発言を見出し、これを提示することにより、『桃太郎』研究に大きな展開を呼び込んだ。

桃太郎はまさに帝国主義日本の戯画ともなっている。(略) 芥川桃太郎はまさに「わるもの」なのである。(略) 一体何の影響で桃太郎に侵略者としてのイメージを持つようになったのか。わたしは中国の思想家章炳麟<sup>マ</sup>Chang Pinglin (一八六九—一九三六) の存在を抜きにして、芥川の桃太郎観は語れないものと思っている。(略) 見逃し得ないのは、「僻見」(『女性改造』大正一三・三一九) 中の次の一章である。(傍線引用者、以下同じ)。

と、新たな視座を提出した関口は、芥川「僻見」より、「予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない」との章太炎(＝章炳麟)の発言と、それに対する芥川の感想「先生はまことに賢人である。(略) この先生の一矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでゐる」を紹介したうえで、以下のごとく論断した。

章炳麟の言葉には、侵略者桃太郎というイメージが日本帝国主義、特に当時の日本政府の植民政策と重ねられている。芥川はそれ

を鋭く察知し、そこに真理があるのを見抜く。／中国旅行から帰って三年後、芥川は勃興するプロレタリア文学に刺激され、章炳麟のこの言葉の意味を改めて思い出し、自らの桃太郎に託した。

さらに近年になると、関口の指摘をふまえつつも、「侵略者桃太郎」と「日本帝国主義」「日本政府の植民政策」にまつわる『桃太郎』の主張を、日中関係にのみ限定しない広い視点から捉え直した、土屋忍「大正期「南洋」論の展開——鶴見祐輔と芥川龍之介」(『社会文学』二〇〇三・九) が登場する。

芥川は、桃太郎を侵略者とすることにより侵略行為を風刺することには成功したが、桃太郎の造型が単純化されているため、その眼差しは同時代の侵略行為を支える帝国主義の厄介な部分には届いていないように見える。帝国主義の厄介な部分とは、帝国主義がヒューマニズムと結託している点にある。(略) 芥川は、「鬼が島の独立」を念頭に置いているが、侵略者桃太郎の性格には鬼への指導者意識も連帯感も付与していない(逆に鬼には桃太郎を理解しようとする姿勢がみられる)。現実には、侵略者桃太郎が芥川の造型したほどに単純でならず者ではなくとも、すなわち、意志決定主体に大義があるうがなからうが、そこに至る手続きが民主的であろうがなかろうが、人間の侵略行為は近視眼的で身勝手なヒューマニズムによって正当化され得る。芥川が批評し得たのは、当時の帝国主義というよりもむしろ、支配の手段となる暴力一般ではないだろうか。『桃太郎』の鬼が島には、特定化されていない「イメージとしての「南洋」」が付与されているとする新見を提示した土屋は、『桃太郎』の主題を右のように大きく読み換えた。

文化的な生活を平和に営んでいた罪のない鬼たちを、暴力で恐怖の底

に突き落とす、極悪非道な桃太郎一行は、暴虐で理不尽な存在に他ならず、そこには侵略行為、あるいは暴力それ自体に対する批判がたしかに読み取れる。また、空腹を抱える無産階級（犬・猿・雉）を黍団子半個で囲い込み、危険を伴う外征の伴とする昔話「桃太郎」には、資本家と無産階級を巡るいびつな関係性を指摘し得る余地が十分にある。以上に見たとおり、先学の見解はいずれもきわめて説得的だ。一方的な侵略や暴力、あるいは搾取の主体である桃太郎が、「わるもの」「ならず者」としてポジショニングされていることは論を俟たない。

しかしながら、芥川『桃太郎』には、悪辣漢桃太郎に対する批判や批評を展開する小説と捉える従来の解釈では、説明の尽くせない謎が存在する。

人間の知らない山の奥に雲霧を破つた桃の木は今日もなほ昔のやうに、累々と無数の実をつけてゐる。勿論桃太郎を孕んでゐた実だけはとうに谷川を流れ去つてしまつた。しかし未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠つてゐる。あの大きい八咫鴉は今度は何時この木の梢へもう一度姿を露はすであらう？ あゝ、未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らずに眠つてゐる。……なぜ小説の語り手は、桃太郎に代表される桃実が孕む存在を、末尾で「天才」と呼び換えるのか。『桃太郎』の文脈を丁寧に通つてみても、気随気儘な悪辣漢、桃太郎を、「天才」と呼び換える理路は見出せない。「天才」を、単なる擲揄や皮肉として解釈すれば、辻褄を合わせることが可能だが、それでは結末に二度までも「未来の天才」の語を畳み込む必要は認められず、蛇足の感が拭えない。

『桃太郎』を、植民地主義や侵略行為への批判を眼目とする物語と読む場合、腑に落ちない点は上記にとどまらない。以下は、活字化に際し

て削除された草稿中の一節である。

桃太郎の本国へ帰つた後、鬼が島の知事になつたのは武断主義の犬である。犬は就任すると同時に、今後角を生やしてゐる鬼は死刑にすると云ふ布告を出した。（略）桃太郎の考へに従へば、桃太郎は勿論犬猿雉はいづれも角を生やしてゐない。然るに鬼は子鬼から年とつた鬼に至る迄、悉角を生やしてゐる。すると鬼の鬼たる所以は角にあると云つても好い。既に角にあるとすれば、完全に角を取り除かない限り、鬼を治することは出来ぬ筈である。<sup>62</sup>

勿論、右の件を欠いていても、桃太郎が悪逆非道の侵略者として造形されていることに変わりはなく、ゆえにこれを、植民地主義、暴力的手段による侵略と支配への懷疑や批判を内包する小説として読み解くことは十分に出来る。しかしながら、『桃太郎』が植民地主義への批判を主眼とする物語であるとしたら、鬼が島を蹂躪し、財宝を奪つて凱旋する最終稿の形よりも、鬼が島を征圧したのち、その統治及び民衆の教化へと移行する草稿の方が、より適しているはずだ。それにもかかわらず、上記の件が削除され、「天才」の地上における出場と退場、未来の「天才」の出来といった事柄で終幕する方向に、小説が生成を見たのは何故なのか。

本稿では、従来顧みられたことのない『桃太郎』における「天才」に焦点をあてることで、『桃太郎』の再読を試みたい。

## 二、芥川『桃太郎』の位置

「天才」についての考察に先立ち、当時広く流通していた「桃太郎」に目を向けることで、芥川『桃太郎』の特徴を確認しておく。「桃太郎」

が、いずれの時代においても一定不変の物語として語られてきたわけではないことは、比較的よく知られている。「桃太郎」の変遷を俯瞰した、滑川道夫の研究『桃太郎像の変容』<sup>8)</sup>は、以下のように述べている。

『桃太郎ばなし』の普及にもっとも力のあったものは巖谷小波の『日本昔噺』シリーズ（明治27）の刊行と、国語教科書である。（略）これに続いて、修身童話『桃太郎』（樋口勘治郎、明治31）が代表するような教化の道具に利用する、教訓性が強調されるものになってくる。この明治期に桃太郎像は教訓の衣を着る。

小波は、鬼が島征伐の理由づけをはっきりあたえる。皇国日本にあだをする憎き奴だから征伐するというのである。（略）明治政府の打ち出した皇室主義の教學思想に同調する方向において「桃太郎像」を描いているといわなければならない。小波は後年この部分を書き改めて明朗闊達な桃太郎像を描く方向に進んでいくが、すくなくともこの明治二十七年の時点における『桃太郎』は、神格化され、皇国主義思想に彩られたものであることは否定できない。（略）日清戦争という戦時色も強まる情勢が背後に動いていたのである。

巖谷小波の『桃太郎』が、『日本昔噺』シリーズの第一編として博文館から上梓されたのは、一八九四年だが、一九〇三年にも、やはり小波による『校訂日本昔噺桃太郎』が出版されている。刊行時期に約一〇年の開きがある両者の異同は、小さくない。たとえば、鬼の酋長の改心と命乞いにもかわらず、「法の下」に仮借なく彼を斬罪に処し、剩え「鬼瓦」に変わって晒しものにするという、桃太郎の酷薄非情な所行は、後者では削除されている。こうした、初版にのみ見られる桃太郎の振る舞いは、もはや勇猛を踏み外した暴挙でしかない。だが興味深いことに、そ

のような非難は、必ずしも当時の読者と共有できないようだ。『日本昔噺桃太郎』に付された坪内逍遙の序文には、「あはれ此のあどけなきお伽物語、さゝ波君の筆にうつされて、可憐無邪氣の詩となんぬ」（春のや主人「序」）との一文が見られるのである。

現代の読者なら違和感を禁じ得ないであろう、桃太郎一行の暴状に対する、同時代の無頓着あるいは寛容は、一体何に起因するものなのか。『日本昔噺叢書』全二四冊（博文館、一八九四〜九六）が、『日本昔噺（東洋文庫）』（平凡社、二〇〇一・八）として復刻された際に付けられた上田信道の解説に、興味深い一節が見られる。

欧化主義への反動や不平等条約に代表される欧米諸国への反発から、わが国の伝統を見直そうという気運があった。そうした気運の中でこの叢書が企画されたことは決して偶然ではない。（略）朝鮮半島では日清両国の軍事的緊張が高まっていた。（略）『桃太郎』は日清両国の開戦必至という高揚感の中で執筆されたことがわかる。（略）明治国家が初めて経験する本格的な対外戦争に際して小波の高揚する感情を反映した所為であったと解すべきであろう。

上田の解説は、様々に語り継がれてきた「桃太郎」が、民族意識の高揚をバックグラウンドに持ちながら、尚武的気象の養成、皇国主義の内面化といった教化のプロセスに組み込まれていった様態を分かりやすく伝えている。「開戦必至という高揚感」の中で、武勇により鬼たちを撃破し島を制圧し、巨万の財宝を収奪して故国に凱旋する桃太郎は、時代の要求に合致する一つのヒーロー像であったのだろう。小波『桃太郎』は、大いに人気を博した。当時の市民たちが、この放胆な猛者に、日本の置かれた状況を打開する可能性を期待し、彼を（日本一）と呼び慣らすことにうべなっただとしても、現代の価値観から安易に批判することは難

しい。

とはいえ、日露戦争を経て大正時代になると、桃太郎の侵略者としてのあり方、又は廉価で危険な労働を強いる資本家としてのあり方への疑問も嵩じ、それ以前の桃太郎像への修正が、盛んに行われ始める。滑川（前出）が、

大正期に入ると『気はやさしくて力持ち』のイメージをもつ桃太郎として童話化され、主として幼児絵本や低学年の読みものになって普及する。団子を交換条件にせず、自主的に家来になるとか、『一つはやれぬ、半分やろう』がふつうであったのに、気前よく一つまるごとやるとか、降参した鬼をゆるしてやるとか、鬼が自発的に宝物をさし出すといったふうに侵略行為的な『分捕り』が訂正されてくるのである。／ところが昭和初頭のプロレタリア児童文学では、黍団子半分ずつで雇った桃太郎が搾取者として描かれ（略）、やはり違う立場から教化に利用されていく。

と指摘するように、桃太郎は傑物らしく仕立て直され、児童教化の材料として、広く利用されるようになった。初等教育の現場で、普遍的な『義』の英傑としての桃太郎を積極的に流布していた様子は、尋常小学校の教科書に明確に刻まれている。一例として、『修正尋常小学読本教授細案 巻1』（目黒書店、一九二五年）を参照してみよう。本書によれば、教授上の「主眼」は「桃太郎の童話を知らしめると同時に尚武的気象等の養成に資す」点に置かれている。また、「教法」欄には、「猿・犬・雉等については（略）どこまでも桃太郎を主人公とし、これ等は義の味方者として、副次的に取扱つてよい」とある。注目すべきは、孝や忠義、協調協力といった要素が重視されてはいても、あくまで〈主眼〉は、「尚武的気象」の育成に置かれている点だ。芥川『桃太郎』と同時期の尋常

小学校の教室で、「桃太郎」を使った武勇を尊ぶ心の涵養が、意識的に施行されていたことに傾注しておきたい。

ところで、さきに取り上げた小波の『桃太郎』と、芥川の『桃太郎』とは好対照を成している。小波『桃太郎』が、「桃太郎」の普及に絶大な貢献を果し、近代における「桃太郎」の定型作りに寄与した事実を考慮すれば、それと芥川『桃太郎』との差異を明確にしておくことは、後者の個性を把握するための有効な補助線になるはずだ。以下で、鬼が島征伐の動機を例に、両者を比較対照してみたい。

〔小波〕『略』鬼心邪にして、我皇神の皇化に従はず、却て此の蘆原の国に寇を為し、蒼生を取り喰ひ、宝物を奪ひ取る、世にも憎き奴に御座りますれば、私只今より出陣致し（略）貯へ置ける宝の数々、残らず奪取て立ち帰る所存。（略）』

〔芥川〕鬼が島の征伐を思ひ立つた（略）訳はなぜかといふと、彼はお爺さんやお婆さんのやうに、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだつたせみである。

「蒼生を取り喰ひ、宝物を奪ひ取る」ことが征伐を正当化するなら、同様の行為を鬼に対して働いた、桃太郎とその国を討伐することもまた、正当化されるはずだ。小波『桃太郎』的な動機は、「蘆原の国」日本に対する侵略行為を征討と見なすことに根拠を与えるのを許容しない限り、その論理性を担保できない。侵略それ自体が不合理である以上、その説明は詭弁に終始するのが道理である。ゆえに、「あらゆる罪惡」を成した末、「至る処に鬼の死骸を撒き散らし」た桃太郎の前に、生き残った数人と共に降参し、「平蜘蛛のやうに」ひれ伏した鬼の酋長が、征伐を受けた理由を「恐る恐る」問うた際、芥川『桃太郎』は以下のよ

うにしか答えない。

「日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹の忠義者を召し抱へた故、鬼が島へ征伐に来たのだ。」／「ではそのお三かたをお召し抱へなすつたのはどういふ訳でございますか？」／「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団子をやつても召し抱へたのだ。——どうだ？ これでもまだわからないといへば、貴様たちも皆殺してしまふぞ。」

矯飾を取り払ったのちに残る鬼退治の動機は、これ以上でもこれ以下でもない。詭弁を交えずに語られる征伐の根拠はこのように、倫理に離反するのである。

鬼は熱帯的風景の中に琴を弾いたり踊りを踊ったり、古代の詩人の詩を歌ったり、頗る安穩に暮らしてゐた。その又鬼の妻や娘も機を織つたり、酒を醸したり、蘭の花束を拵へたり、我々人間の妻や娘と少しも変らずに暮らしてゐた。

と語る芥川『桃太郎』は、昔話「桃太郎」とは異なり、鬼が島にも生活と文化があり、島独自の産業があり、女性や子供、老人たちが暮らしているという現実、きわめて意識的だ。「実はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様にどういふ無礼を致したのやら、とんと合点が参りませぬ。就いてはその無礼の次第をお明し下さる訳には参りますまいか？」と尋ねる酋長に対し、分からないなら「貴様たちも皆殺してしまふぞ」と脅す桃太郎は、彼らの生活のみならず、自らが犯した罪に対して与えられるのが罰である、という鬼たちの法、倫理観、思慮分別といったものをも、ことごとく蹂躪しているのだ。『桃太郎』の叙述に、桃太郎を義士と見なせる余地は一切残されていない。

ここにおいて、最初の疑問が再び呼び戻されることになる。『桃太郎』

は何故、悪辣極まりない桃太郎を「天才」と呼び換えるのか。

### 三 大正時代の「天才」観

「天才」に関する科学的研究の歴史は比較的新しい。初期のまとまった試みとして有名なのは、ダーウィンの従兄弟、フランシス・ゴルトンが著した『遺伝的天才 *Hereditary Genius*, 1869』である。ゴルトンの名は、優生学の提唱者として日本でもよく知られている。明治期を中心に天才主義が盛り上がりを見せたことと、ダーウィニズムの流行や優生学の興隆は勿論無関係ではない。ゴルトンは、常人とは異なる優秀な資質の持ち主としての「天才」を社会発展上望ましいものと見る立場から、優秀者同士の婚姻と出産を奨励する形で、遺伝的に「天才」を作ること提唱した。このような、言わば「天才」の家系、「天才」の血統というような考え方が、皇国史観や父権制社会の確立強化を推進していた時代の雰囲気と同調しやすいことは想像に難くない。ゆえに、大正デモクラシーの高まりとは馴染みにくいこともまた、容易に想像がつくだろう。ゴルトンに限らず、優良な特別の個人が指導的立場を占めることを是とする天才主義は、民衆の時代、平等重視の雰囲気の中では少なからず批判の対象となる。

科学としての新しい政治学を標榜して刊行された大山郁夫『政治の社会的基礎』<sup>(1)</sup>は、芥川『桃太郎』と完全に時代を等しくし、かつ初版からわずか一年余りで一一版を数えるほどの好評を博した、近代政治学史の金字塔的存在だが、同書も、デモクラシーと「差別」の一点を強調する天才主義とは（略）根本的に相容れない」と指摘する。特定の集団が支配的地位を占め、それ以外を支配下に置く組織や社会に対する抵抗の

姿勢を見せるのが、デモクラシーの特色だからだ。明治前半期には崇敬の対象であった〈天才〉は、大正デモクラシーの風潮の中では一転、大々的な批判を浴びることになった。斎藤信策「天才とは何ぞや（天才崇拜の意義を明かにす）」は、以下のように述べている。

科学思想の普及、平等主義の教育、唯物主義の哲学、是や誠に現代十九世紀及び二十世紀の世界を支配せる思想なり。（略）天才の迫害せらるゝ、固より偶然にあらざる也。／夫れ天才は孰れの時と処とにありても窮迫せられ迫害せらるゝ、彼れ固より非有和性なり危険性なり、而して更に彼れは破戒を予想すればなり。然れども現代の如きは尤も天才を迫害しつゝ、あるものに非ずや。科学思想は彼を呼んで精神病患者となし、平等主義は彼を呼んで無意義なる放埒漢となす。<sup>1)</sup>

右の評論は、〈天才〉が迫害され始めた現状を敏感に捉え、「一切の文化は実に天才によりて進歩発展す、文明の本領は独創に外ならざればなり」との立場から、「天才崇拜」の必要性を訴えるものである。ここで強調したいのは、筆者が当時を、「尤も天才を迫害しつゝ、ある」時代と認識している点だ。ここからも、明治末頃より大正にかけて、〈天才〉が〈精神病者〉や〈変態〉に限りなく接近し、排斥されていた状況が確認できる。

以上のような〈天才〉指弾の動向を牽引したのが、『犯罪人論』等で知られるイタリアの医学者、ロンブローゾの書『天才と狂気』（*Genio e follia*, 1864）、<sup>2)</sup>『天才論』（*L'uomo di genio*, 1888）<sup>3)</sup>であった。とはよく知られている。さきの斎藤の評言中に見られる、「科学思想は彼を呼んで精神病患者となし」云々というのも、ロンブローゾを踏まえた発言である。当時、爆発的に流行したロンブローゾの『天才論』は、

〈天才〉を精神病的状態と捉え、〈天才〉の発達を他の機能を犠牲にした結果の頭脳の病的な発達として説く科学を世界的に流通させた。

大山「政治の社会的基礎」（前出）は、以下のように述べる。

或る人が或る特殊の一つの仕事に対する能力を異常に発達せしめるためには、他のすべての仕事に対する能力の発達を犠牲に供するやうなことはないか？（略）ロンブローゾが「天才」を癲癇や発狂やに配せしめたのは、此点から見て、我々を深く考へさせる。（略）「天才」が戸口から這入ると健康が窓から逃げる、という警句の裡に、「天才」価値否定の有力な根拠が含まれてゐる（略）。

平等主義が浸透する中で批判の対象となった天才主義は、ロンブローゾの流行を受け、より本質的な批判にさらされるようになった。同時代における〈天才〉言説の内実と、芥川『桃太郎』における桃太郎像との関係性を闡明するために、ロンブローゾの〈天才〉観をいま少し掘り下げておきたい。ロンブローゾは『天才論』の中で、政治的宗教的革命者はつねに「精神病者あるいは神経病者」であったと述べている。そのうえで、彼らが革命を成し得た原因を大別し、

崇拜とは新しき印象の威圧より生ずる必然な反射運動の別名にすぎない。

狂人のある者は異常な腕力を有してゐる。民衆は力を尊敬する者である。

神狂（theomania）或は野心狂に罹つてゐる者は自から神々或は一国の主帝に鼓吹せられたりと称し、既に多少の傾向ある説の伝播に務める。

狂人は彼らの征服する民衆より知力に於て——少なくとも意力に於て——遙かに彼等より秀れてゐるに相違ない。(略) 彼等が幻覚を真理なりとする確信、それを説く流暢にして力ある雄弁、過去に於ける彼等の凡庸と現在に於ける秀れたる力と目覚しき活躍の著しき対照とが、静平な多数の人心を自然に威圧するのである。

といった整理を行っている。<sup>13)</sup> こうした説に従うなら、実績皆無にして「日本一の桃太郎」「日本一の黍団子」と吹聴し、本来手を取り合うはずのない犬・猿・雉を威圧して従え、鬼が島を制圧し、貧しい故郷に大変革をもたらした日本昔話のヒーロー桃太郎は、「天才」と称される資質を十分に有していることになるだろう。

「天才の生理学」と「狂人の病理学」が一続きであることを数多の例を挙げて証明しようとしたロンブローゾが、その結論において第一に訴えるのは、「天才」に対する適切で十二分な注意と警戒の必要性である。学生はその妄論に踊らされないように、為政者は、過度の圧制を加えることで「天才」を、「狂人より更に危険にして恐るべき謀叛者」に変じさせないように、周到な警戒を払わねばならないと説いている。そのうえでロンブローゾは、『天才論』を以下のように結ぶ。

狂人が屢々天才となり、天才が屢々狂人となるといふ現象は一国の運命が如何に屢々狂人の手中に左右せられたかを説明するものである。そして同時に又狂人が人類の進歩に如何に多大な貢献をなしたかを示すものである。／要するに天才と狂気の現象に発見せられる類似と一致によつて、自然は狂気といふ人世に於ける最も不幸なる事実に対する尊敬を吾人に教めると同時に徒にかの天才の光芒に眩惑せられざらんことを戒めているかの如く思はれる。天才とは畢竟一定の軌道によつて運行する遊星ではなく、偶々地上に現れて

忽然と消え失する流星の如きものである。

「天才」とは、偶然によつてある日突然地上に運ばれ変革をもたらす、無軌道な存在なのだ。このようなロンブローゾの結論から、左記のような、芥川『桃太郎』の冒頭、そして末尾の一節を想起することは難しくない。

一万年に一度結んだ実は一千年の間は地へ落ちない。しかし或寂しい朝、運命は一羽の八咫鳥になり、さつとその枝へおろして来たと思ふと、小さい実を一つ啄み落した。

あの大きい八咫鳥は今度は何時この木の梢へもう一度姿を露はすであらう？ あ、未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠つてゐる。……

ちなみに、明治末から大正にかけて流行をみせたロンブローゾ『天才論』は、『桃太郎』に限らず、同時代の文芸に少なからず影響を及ぼしている。たとえば、森鷗外『キタ・セクスアリス』<sup>14)</sup>や、夏目漱石『文学論』<sup>15)</sup>等々、ロンブローゾの名や『天才論』に触れた例は多い。芥川『路上』<sup>16)</sup>も、その一つである。『桃太郎』と同時代における一つの「天才」観として、『路上』の一節を参照しておこう。

「(略) かの天才と称する連中になると、まづ精神病者との間に、全然差別がないと云つても差支へありません。その差別のない点を指摘したのが、御承知の通りロムプロゾオの功績です。」／「僕は差別のある点も指摘して貰ひたかつた。」／「(略) 成程天才は有為だらう。狂人は有為ぢやないに違ひない。が、その差別は人間が彼等の所行に与へた価値の差別だ。自然に存している差別ぢやない。」／新田の持論を知っている俊助は、二人の女と微笑を交換して、そ



れぎり口を嚙んでしまった。と、新田もさすがに本気すぎた彼自身を嘲る如く、薄笑の唇を歪めて見せた(略)。

医学士新田は、癲狂院を見学に訪れた俊助らに対し、〈狂人〉と〈天才〉について右のように説明する。「御承知の通り」との発言から、ロンブローゾの『天才論』がいかに流通していたかを窺い知ることでもある。

さて、右の引用には新田の〈天才〉観が明示されている。それによれば、天才的所行も狂気の末の所行も、常人の行いから逸脱している点で違いはない。そうしたデヴィアントが〈天才〉と呼ばれるか〈狂人〉と見なされるかは、行為の性質に基づくのではなく、又行為者の性質に基づくのでもなく、ひとえに行為の社会的有効性の度合いに基づくものにも他ならない。すなわち〈狂人〉と〈天才〉の間に差異はない。このように、行為や行為者に対する評価軸を、動機や過程ではなく、結果のみに置く新田の主張には、「微笑を交換して口を嚙」んでしまった『路上』の登場人物同様、多くの読者が首肯し兼ねるであろう。モラルに欠けると感じられる主張に賛同するのは、居心地が悪い。かといって、容易に反駁できないのもまた、登場人物たちと同様ではないだろうか。

さらに、ロンブローゾをはじめとする天才狂気説の流通と連動して、天才主義のみならず〈天才〉それ自体への批判が高まっていた時代状況を提示した。しかし新田の態度は、こうした時代の雰囲気と完全には一致していない点に特色がある。すなわち新田は、天才狂気説を全面的に肯定していながら、必ずしも〈天才〉批判には向かわないのである。

では、ロンブローゾの『天才論』や、その流行していた時代の影響を強固に受けながらそこから乖離する、新田論の個性的な一面は、一体何に起因するのだろうか。

結論を先取りして述べるなら、〈天才〉を〈狂人〉と一連なりの存在

と捉えたうえで、なお〈天才〉を否定しない新田の持論には、ロンブローゾの『天才論』に代表される同時代の先端科学を、ニーチェ哲学によって捉え返した跡、とりわけ『善悪の彼岸』(一八八六)によって消化した形跡が認められる。

倫理的には弁護不可能な〈天才〉を、社会的必要において評価することを躊躇わない新田の態度と、一個の無頼漢を〈天才〉と呼び換える『桃太郎』との近似性を意識しつつ、次章では、〈善悪の彼岸〉に立つ〈超人〉と、『桃太郎』における〈天才〉との連関について考察を試みたい。

#### 四 〈天才〉と〈超人〉

『桃太郎』の研究が、関口安義の発見によって大きく展開したことは前述のとおりである。以来、関口が引用した「予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である」(『僻見』)という、芥川との会談中の章太炎の言葉はしばしば参照されてきた。ところで、この一文を元の文脈に戻して読み返してみると、記述の中心が「桃太郎」ではなく、章題にもなっている「岩見重太郎」に置かれていることが分かる。ここでは、先学が省略した部分に目を向けてみたい。

「僻見」の第二章「岩見重太郎」は、豪傑岩見重太郎の生命の富饒を軽蔑し得ないのは、「あらゆる架空の人物」のそれを軽蔑できないのと同じ理屈によると述べる。つまり、岩見が架空の豪傑であるがゆえに、その生命を永遠に永らえることは、例えばファウストやマクベスの場合と同様だと説くのである。こう語った直後に、架空の豪傑「桃太郎」を巡る章太炎とのエピソードが挿入されている。

まだ如何なる日本通もわが章太炎先生のやうに、桃から生れた桃太

郎へ一矢を加へるのを聞いたことはない。のみならずこの先生の矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでゐる。桃太郎もやはり長命であらう。もし長命であるとすれば、暮色蒼茫たる鬼が島の渚に寂しい鬼の五六匹、隠れ蓑や隠れ笠のあつた祖国の昔を嘆ずるものも、——しかし僕は日本政府の植民政策を論ずる前に岩見重太郎を論じなければならぬ。

このように「僕」は、桃太郎觀の開示を取り止め、話柄を直ちに岩見重太郎へと戻す。

岩見重太郎は（略）生命に富んだ、輕蔑すべからざる人間である。（略）僕の岩見重太郎に輕蔑を感じるのには事実である。（略）けれども岩見重太郎は如何なる惡徳をも償ふ位、大いなる美徳を持ち合せてゐる。いや、必しも美徳ではない。寧ろ善惡の彼岸に立つた唯一無二の特色である。（略）兎に角重太郎の強いことは天下無敵と云はなければならぬ。かう云ふ強勇はそれ自身我々末世の衆生の心に大歡喜を与へる特色である。（略）我々の真に愛するものは常にこの強勇の持ち主である。常にこの善惡の觀念を脚下に蹂躪する豪傑である。我々の心は未だ嘗て罪惡の意識を逃れたことはない。（略）豪傑は我々のやうに罪惡の意識に煩はされない。（略）我々はかう云ふ旺盛なる「我」に我々の心を暖める生命の炎を感じるのである。或は我々の到達せんとする超人の面輪を感じるのである。／まことに我々は熱烈に岩見重太郎を愛してゐる。（略）重太郎は牢破りと共に人間の法律を蹂躪し、更に又次の佛退治と共に神と云ふ偶像の法律をも蹂躪したと云はなければならぬ。

〈善惡の彼岸〉に立ち、我に従ひ、天の法も人の法も無關係に事を成す豪傑のみが、変革をもたらすことができる。岩見重太郎は、道德を超越

しているがゆえに輕蔑すべき人間であり、かつまた「輕蔑すべからざる」人間なのである。飽くまで、無法者だからこそその豪傑なのだ。

岩見重太郎を知つたのは本所御竹倉の貸本屋である。（略）僕は其処に並んでゐた本から、恐らくは一生受用しても尽きること知らぬ教訓を學んだ。超人と称するアナキストの尊嚴を學んだのもその一つである。成程超人と言ふ言葉はニイチエの本を読んだ後、やつと僕の語彙になつたかも知れない。しかし超人そのものは——大いなる岩見重太郎よ、伝家の宝刀を腰にしたまま、天下を睨んでゐる君の姿は夙に僕の幼な心に、敢然と山から下つて來たツアラトストラの大家を教へてくれたのである。

右のように「僻見」では、「桃太郎」と岩見重太郎、そしてニイチエのいわゆる〈超人〉が、同一の土俵上で語られている。迫り来る危機に對して、遅々たる進歩が間に合わず、追い込まれてしまつた社会、「末世の衆生」は、人の法も神の法も意に介さず蹂躪する岩見、あるいは〈超人〉や〈天才〉に望みを託さざるを得ないのかもしれない。

本稿では、章太炎の桃太郎批判に感心した後、「しかし僕は（略）岩見重太郎を論じなければならぬ」と、直ちに切り替える、切り替えずにいられない筆の運び方に、より一層の注意を傾けたい。

桃太郎を非難する章太炎の主張は的確だ。しかし、その正しさによつて、日本の植民地政策の過ちを批判するのみで済ましていることのできない、緊迫した時代の雰囲気が存在していた。「僻見」の第二章「岩見重太郎」が語るのは、桃太郎の植民地主義の横暴ではなく、その暴虐を善惡の二項對立によつて心根正しく退けることのできない、時代の現実そのものだろう。岩見を輕蔑し得ないという事實を確認しなければならなかつたからこそ、その見識を「僻見」と自嘲したのではなかつたか。

さて、ニーチェ『善悪の彼岸』は、行為の価値を、行為そのものやその意図の善／悪と関わりなく、結果のみによって判断していた（道徳以前）の時代の価値観を取り戻そうと呼びかける。道徳以後の時代、すなわち近代社会を支配する（宿命的な新しい迷信）は、ある行為に対する価値決定の基準を、行為の結果ではなく意図に紐付けし、意図の道徳性、善悪こそが重要だとする認識を普及させた。『善悪の彼岸』が説くのは、そうした近代社会の価値観を転換させ、道徳以前の時代の価値観に立ち返ることの必要性である。ちなみにその主張は、『ツァラトゥストラはかく語りき』（一八八三―八五）で既に、分かりにくく語られていたものと同様である。明晰な言葉に置き換えられた同一のメッセージの反復は、大正時代の読者にとっても、滲透しやすかったことだろう。

他者や隣人のために、というような感情は、道徳的であろうと心がける人間にとって、受け入れやすいものだ。しかしそうした感情は、いつの時代にも有効なものとは限らない。外圧その他によって追い詰められた社会は、急速な進歩の必要性に迫られる。そうした時代が行き詰まりを打開するためには、一切の道徳的偽善を必要とせずに行動し、命令を下すことのできる（天才）、あるいは（超人）の出現に俟たねばならないと、ニーチェは語っている。

彼等（命令者等…引用者注）が彼等の良心の呵責を免れる唯一の方法として知つてゐるのは、自らより古き、或はより高き命令（祖先だとか、憲法だとか、正義だとか、法律だとか、加之神だとか云ふやうな）の遂行者として振舞ふことである。或は蓄群の考方から蓄群の格言をかりて来て、例へば「彼等の民衆の第一の僕」として、或は「一般的福祉の機関」として自らを弁明することである。（略）此等の蓄群の歐羅巴人の為めにある絶対的命令者の出現といふこと

が、一の堪へがたくなりつつある圧迫からの如何なる救済であるか、如何なる恩沢であるかは、ナポレオンの出現が及ぼしたる影響から最終の最大の証拠を与へられる。<sup>17)</sup>

以上に見てきたように、『桃太郎』と同時代の言説の中で、桃太郎と岩見、岩見とニーチェが結びつき、そして岩見とニーチェの結びつきを介して桃太郎とニーチェ、（天才）と（超人）が結びつく。このような見取り図を前提とすることで、はじめて『桃太郎』の（天才）を解釈する通路は、開かれるのではないだろうか。

昔話「桃太郎」は、小波によって近代の童話にリメイクされる以前から、様々に語られ、書き継がれてきた。しかし芥川『桃太郎』以前に、鬼が島征伐の理由を、道徳的尺度も社会的使命も一切無視し、働きたくないという我欲のみに置いた桃太郎、独立不羈の（超人）、傍若無人の（天才）として造形された桃太郎が、ただの一人でもあっただろうか。

『桃太郎』では、桃太郎の養父母たる老夫婦が、老いてなお山や川や畑で、日々の労働に明け暮れている。そこでは労働に、暮らしの安楽は比例していないのだ。「お爺さんやお婆さん」の暮らしを続けていたら、今日明日にも見舞われるかもしれない脅威に対抗することはできない。対抗できない以上、彼らの未来予想図にあるのは、敗北や衰亡である。しかし、桃太郎がその世界を一変させた。彼は、「お爺さんやお婆さんのやうに」働くかわりに、極悪非道なやり方、正当化し得る根拠を持たない暴力によって、鬼が島の財宝を奪い、大変革をもたらしたのである。芥川『桃太郎』の桃太郎は、軽蔑すべき悪だ。しかし、逼塞する時代状況への憂慮がますます濃くなりゆく時代にあつて、豪傑の登場に希望を託さざるを得ないとしたら、彼を軽蔑、排斥することは難しい。

ここにおいて、昔話に材を取りながら、（いま）を明確に呼び起こし、

強調する芥川『桃太郎』の語り手の姿勢が、改めて想起され始める。『桃太郎』は、桃太郎の従者として馴染み深い雉に対し、ことさらに以下のような紹介をほどこすのである。

黍団子の勘定に素早い猿は尤もらしい雉子を莫迦にする。地震学などにも通じた雉子は頭の鈍い犬を莫迦にする。<sup>18)</sup>

雉と地震との関係は鯁同様、俗信として古くから流通しているものだが、『東京朝日新聞』（一八八八年七月一日）に「新しき科学の一部として研究せらるる地震学」とあるように、地震学は、地震を科学的に研究する近代の学問である。『桃太郎』と同時代、関東大震災から一ヶ月余りで上梓された、諏訪徳太郎『誰にも必要な地震の知識』<sup>19)</sup>に以下の件がある。

只今の関東大震災以来、世人が地震に対して非常に恐怖の念を抱くやうになり、また地震に関する科学的の常識を渴望するやうになつたのである。

古くからの云伝へに、／「地震の起る前には雉が鳴く」／と、云はれてゐる。（略）動物中には、感覚の大変鋭敏なものが多い。（略）我々には最初の軽い震動は感じないが、動物にはよく分る。（略）それで／『全く取るに足らぬ』／と、云つて、全然捨てる訳にも行かぬのである。或る熱心な学者が、雉を沢山飼つて、雉の挙動と地震との関係を、永らく研究して見たが、余り得る所がなかつたと云ふことである。

「余り得る所がなかつた」とされる実験は、内容からみて、大森房吉「雉子ト地震」<sup>20)</sup>を指すと考えられる。彼は、一九一三年末から一六年末にかけて、東京小石川の渡邊治右衛門邸の庭園を借り、雉と地震の関係を科

学的に証明する実験を試みている。同時代において、俗諺「地震の起る前には雉が鳴く」を、近代的学問としての地震学に変える試みが行われていたことが分かる。一九二三年九月一日に発生した関東大震災から、一九二四年七月発表の『桃太郎』までは、一年も経過していない。この小説の語り手は、昔話「桃太郎」を語りながら、読者の意識を、きわめて特殊ないまに、明らかに引き寄せているのである。

桃太郎＝理不尽な圧制者＝天才という図式を、一切の解説をほどこすことなく末尾で唐突に放り投げる『桃太郎』の態度は、『善惡の彼岸』のごとくには決然としていない。だがそれは、態度を決めかねた優柔さに起因するのではなく、『桃太郎』の選択であつたと見るべきだろう。帝国主義、植民地政策、暴力による侵略行為を批判し、軽蔑する積極的姿勢を見せつつ、他方で、桃太郎的〈天才〉、〈善惡の彼岸〉に立つ圧倒的強者、大変革者を排斥できず、その登場に期待をかけずにいられないような不安に満ちた時代、善良で臆病な市民の心の緊張、潔癖と保身、奮起と怯懦等々のせめぎあい、そしてそうした葛藤に伴う不面目、それら一切を抱え込んだ時代の張り詰めた心性を、小説『桃太郎』は内蔵しているのである。

## おわりに

『桃太郎』は、その末尾に着眼したとき、市民の目線から同時代の政治や社会を見据えて発せられた、一種の天才論としての相貌を見せ始める。

〈天才〉桃太郎の活躍は、国を富ませ、日々の厳しい労働と貧しい生活から、老夫婦や桃太郎らを解放した。産業（織物）があり、文化的に栄え、食料も十分にあったらしい豊かな鬼が島を統治下に置いた桃太郎

側が得る利益は、掠奪してきた宝物だけではない。

昔話「桃太郎」は、鬼が島征伐の結果、桃太郎が何を得たのか、もたらしてくれたのかを語り出してきた。桃太郎は、宝物という富と、それを持つて凱旋するという名誉を手に入れ、老父母を喜ばせるといふ孝<sup>コ</sup>を実現させた敬慕すべき武人として、一方的な視点から語られてきた。しかし芥川『桃太郎』は、桃太郎の鬼が島征伐によって失われたものは何か、と問うことも忘れてはいない。『桃太郎』は鬼が島の様子を以下のように伝えている。

鬼が島は（略）美しい天然の楽土だつた。かういふ楽土に生を享けた鬼は勿論平和を愛してゐた。（略）鬼は熱帯的風景の中に琴を弾いたり踊りを踊つたり、古代の詩人の詩を歌つたり、頗る安穩に暮らしてゐた。その又鬼の妻や娘も機を織つたり、酒を醸したり、蘭の花束を拵へたり、我々人間の妻や娘と少しも変らずに暮らしてゐた。

鬼たちにも生活があり家族がいることに着眼した「桃太郎」も十分珍しいが、鬼たちが育んできた芸術・文化を特筆した「桃太郎」はさらに珍しい。芥川『桃太郎』の桃太郎は、芸術・文化を蹂躪した恕すべからざる悪として、疑いを差し挟む余地なく明確に位置づけられている。

『桃太郎』は〈天才〉を決して肯定してはいない。暴力を嫌悪し同時に強く恐怖するのは、きわめて一般的な感覚である。そういう当たり前の主体が、今日危うく保たれている平和な日常や、文化芸術への敬意の崩壊しかねない逼塞した時代状況に置かれたとき、〈善悪の彼岸〉にいる〈天才〉の出来を拒絶し得ないという現実を、『桃太郎』は余すところなく捉え、伝えている。

ところで、正義を愛し暴力を嫌う主体にとって、歓迎せざる〈天才〉

の出現に、たとえ僅かであっても期待をかけねばならないのは、屈辱に満ちたことではないか。それでも一人の桃太郎を拒絶し得ないこの語り手ほど、人間の姿、在り方を等身大で現出させるものは他にない。桃太郎を、軽蔑すべき大悪党として描き切った小説『桃太郎』は、桃太郎的存在に對し、明確な嫌悪を抱きながら、同時に彼を〈天才〉と呼んだ。〈善悪の彼岸〉に立つ〈天才〉を、道徳的に弁解の余地なき悪として造形しながら、彼を軽蔑することができず、その出現を拒否し得ないのだから、『桃太郎』の主張は、余程曖昧なものだと言わざるを得ない。だが曖昧だからこそ、この語り手は生々しい。

その曖昧なところ、微妙なところに、時代状況と政治によって逼迫された個人の姿、社会や時代の行く末に怯え、〈天才〉出現の必要を否定し得ず、しかし文化を蹂躪する暴力の存在を心底嫌悪する、等身大の市民が写し込まれているのではないか。

文学にできる仕事、少なくともその大きな意義の一端が、この破天荒な『桃太郎』のなかに見出せるはずだ。

## 【注】

(1) 本稿では、いわゆる昔話「桃太郎」と、それに基づく個別の物語としての『桃太郎』を区別するために、前者には「」、後者には『』を用いた。

(2) 博文館、一八九一・一〇。いわゆる昔話「桃太郎」以後の世界を舞台とする。鬼の老夫婦の子、鬼桃太郎が宿敵桃太郎退治に出掛けるが、その途上、伴の毒龍と争った挙げ句海中に落下し、桃太郎との対決の土俵にさえ上がり損ねるという話。

(3) 清流出版、二〇〇一・七。桃太郎は、川面を浮遊中に独力で誕生し、犬・猿・雉を友として仲良く遊びながら成長する。犬・猿・雉が鬼たち

に度々いやがらせを受ける状況に憤慨した桃太郎が立ち上がると、犬たちも主体的に鬼退治に加わり、自作したらしい黍団子(串団子)を食べ、鬼と戦う活力を得、ついに鬼たちを圧倒するに至る。桃太郎らは、敗者である鬼たちに反省を促し、以後、彼ら遊び仲間として、愉快に暮らしてゆく。桃太郎は一貫して自主自立の気性を持ち、矛盾のない正義の味方として描かれている。本作の桃太郎には養父母が存在せず、また伴は友に改変されている。したがって本作には、昔話「桃太郎」のモチーフを成す「孝」や「忠」の要素は絶無である。

(4) 太宰治『お伽草子』(筑摩書房、一九四五・一〇)。

(5) 「方位」(一九八二・五)。

(6) 「民主文学」(一九八二・一一)。

(7) 岩波書店版『芥川龍之介全集』第二二卷(一九九七・一二)所収。

(8) 東京書籍、一九八一・三。

(9) ここにおいて、暴虐な主君の侵略行為の実現を招き寄せる悪因として、「忠臣」の存在が名指しされていることは看過できない。芥川『桃太郎』は、侵略や暴力に対する批判に加え、「忠義」に対する疑念をも表しているのである。

(10) 同人社、一九二三・二。副題に「国家権力を中心とする社会闘争の政治学的考察」とある。

(11) 「帝国文学」(一九〇四・一一)初出、『芸術と人生(昭文堂、一九〇七・六)所収。

(12) 『天才論』の邦訳は、英訳(W. Scott: *The man of genius*, 1891)からの重訳の形で比較的早くから試みられ、畔柳都太郎『天才論(新撰百種第五編)』(普及舎、一八九八・二)が出されている。ただし、これは抄訳で、全訳としては辻潤『天才論(植竹文庫第三編)』(植竹書院、一九一四・二)が古い。同書は改訂を加えながら版を重ね続けて大いに流行し、一九三〇年には改造文庫にも入れられている。これらの動きと前後して、『天才』をめぐる言説は非常に多く紡がれた。たとえば「東亜の光」(一九二二・六)では「天才号」なる特集も組まれている。

(13) 『天才論』第三篇第四章「政治上及び宗教上の狂者と半狂者」。引用は、ロンブローゾ、辻潤訳『訂正 天才論』(三星社出版部、一九二六・一一)によった。

(14) 「スバル」(一九〇九・七)初出。『キタ・セクスアリス』には、「Lombrosoなんぞの説いてゐる天才問題」といった件が見出せる。

(15) 大倉書店、一九〇七・五。『文学論』には、「実例に就て天才の風貌を窺はんと欲するものはLombrosoのThe Man of Geniusを繙くべし」(第五編第一章「一代ニ於ル三種ノ集合的F」との一節が見られる)。

(16) 「大阪毎日新聞」(一九一九・六・三〇)八・八)初出。

(17) 「善悪の彼岸」第五章「道德の植物学」。引用は、『ニイチエ全集』第六編(生田長江訳、新潮社、一九二三・四)によった。

(18) この件は従来ほとんど顧みられたことがないが、黄曉波「隠蔽されたストーリー——芥川『桃太郎』の生成について——」に、「雫が『地震学』に通じているとされていることも注目されよう。(略)大震災直後の日本人読者に対して、この言葉がいかにインパクトを持っていたかは想像にたかない」(『文学研究論集』二〇〇七・三)との発言が見られる。

(19) 京文館、一九二三・一二。

(20) 「震災予防調査報告」(一九二一・三)。

【付記】『桃太郎』の引用は、岩波書店版『芥川龍之介全集』一一卷(一九九六・九)より行い、旧字体は新字体に改めた。